

## ＜文学部の教育研究目標の進捗状況＞

教育研究目標(タイトル)		評価指標	評価尺度	進捗状況
目標1	人文学の基礎を学び 裾野を広げる。	・ 現状における問題点の洗い出しと改善方策の構築と運用 ・ 課題の明確化と改善方策の構築と運用	A: 運用 B: 構築 C: 準備 D: 検討	2018年度目標値 B
				2018年度自己点検・評価後 (2018年度帳票提出時点) B
目標2	学際的な視点・発想の獲得とその伸張。	現状における問題点の洗い出しと改善方策の構築と運用 専修横断的な科目の再検討と充実化 ・ 国内および海外におけるセミナー・プログラムの構築と運用	A: 運用 B: 構築 C: 準備 D: 検討	2018年度目標値 B
				2018年度自己点検・評価後 (2018年度帳票提出時点) B
目標3	自らが獲得した知の社会への発信	受講生自身による達成度・充足度評価	A: 継続的に受講生の80%の達成感・充足感 B: 受講生の約80%の高い達成感・充足感 C: 約60%の高い達成感・充足感 D: 約40%の高い達成感・充足感	2018年度目標値 C
				2018年度自己点検・評価後 (2018年度帳票提出時点) B
目標4	他者の中で自分を開く	科目内容の再検討と充実化 フュージョン科目の構築と運用	A: 運用 B: 構築完了 C: 準備段階 D: 検討段階	2018年度目標値 B
				2018年度自己点検・評価後 (2018年度帳票提出時点) A
目標5	深い専門的知識と高度な思考能力との協同体制	大規模演習の現状分析とそれに基づく対策 現状調査とそれに基づく対策の構築 制度の検討と構築、運用	A: 運用 B: 構築 C: 準備段階 D: 検討段階	2018年度目標値 C
				2018年度自己点検・評価後 (2018年度帳票提出時点) C

<2016～2018年度の自己点検・評価の取組み総括>

**総括1 <3年間の取組みによって改善したこと、向上したこと>**

(1)教育目標1では2年次に人文学総合科目の導入決定、目標2, 4では東アジア文化交流セミナー実施、目標3ではハンズオン・ラーニング科目の導入、目標5では優秀卒業論文の表彰および発表の計画・準備など、学外交流や学外に向けた情報発信の取組みが進んだ。

(2)従来改善点として挙げられながら、実行に至らなかった諸問題について、目標を掲げることで議論が促進されたことは大きな意義があった。十分な成果が上がらなかった部分であっても問題意識の共有がなされたことは重要である。目標の設定と実施に対し、第三者評価が行われることで、計画の修正の指標となり、目標が明確化されていった点は大きな意義があったと考えられる。

(3)東アジア文化交流セミナーA・B を開講した。本学および蘇州大学からも定員を超える申し込みがあった。授業期間中は、双方の学生が積極的に会話をし、交流を深める様子が見えられた。授業後にも、他国の人の考え方や優しさを知って、自身をみつめなおすことができたという趣旨の感想が多くあった。

(4)2019年度から運用する新カリキュラムを制定した。改編の趣旨は、初年次からの専門教育を従来よりも充実させること、および、学際性の高い科目を2年次のもので提供し基礎から応用への橋渡しを実現することである。

(5)企業や神戸文学館での実習を伴うハンズオン・ラーニング科目を新設し、社会と連携した学びをカリキュラムの中に取り入れた。

(6)英語教育の効果を上げるために習熟度別のクラス分けを導入し、学生がそれぞれの学力に見合った授業を受けられる体制を整えた。

(7)学科専修それぞれにおける卒業論文審査のあり方について情報共有を行い、より信頼性の高い審査体制の構築に取り組んでいる。

**評価専門委員・所見記入欄:**

■総括1について

- ・ 各目標に対して、具体的な成果を出しており評価できる。2018年度も、目標3「自らが獲得した知の社会への発信」および目標4「他者の中で自分を開く」については、それぞれ目標を上回る成果で良い。(A)
- ・ 良好な進捗状況であり評価できます。更なる伸展が期待されます。(C)
- ・ 目標として取り上げることで、議論が活性化し、問題の共有や様々な試みにつながったことは本取組みの成果であると思います。今後も組織的な取組みに期待しています。(D)
- ・ 目標通りに進捗しており、さまざまな施策を実現に向けて努力しているものと思います。(E)
- ・ 「検証の結果、課題はなく見直す必要はなかった」になっているが、指標の向上部分の根拠は記載されているか。(F)
- ・ 3年間で様々な取組みが進められたことがうかがえます。今後はこれらの成果についても検証され、取組みの継続、見直しに生かされることを期待します。(G)
- ・ 従来改善点として挙げられながら、実行に至らなかった諸問題について、教育研究目標として取り組むことによって、議論が促進した旨の記載がありますが、今後も学部としての PDCA サイクルを積極的・自律的に運用されることを期待しています。(H)